

2016年4月4日

<報道関係各位>

一般社団法人 日本化学工業協会

—国際化学工業協会協議会 (ICCA)

および国立医薬品食品衛生研究所 (NIHS) 共催による—

『LRI 国際ワークショップ』を6月に淡路島で開催

一般社団法人 日本化学工業協会(住所:東京都中央区、会長:小林 喜光(株)三菱ケミカルホールディングス 会長)、以下「日化協」が所属するICCAは、このほどLRI(Long-range Research Initiative: 化学物質が人の健康や環境に及ぼす影響に関する研究の長期的支援活動)に関する国際ワークショップを、NIHSと共催で、アジアで初めて、淡路島の淡路夢舞台国際会議場にて開催します。ワークショップは、6月15～16日の2日間ですが、これに先立ち、教育セッションとして、プレワークショップ(14日)も開催します。

国際ワークショップは、LRIの研究結果の政策への反映やガイドライン化等の具体的な支援について、単に化学工業界だけでなく、産官学が意見交換・議論を行うという基本方針の下、毎年6月にICCA-LRIと各地域の政府系機関との共催で行われています。これまでは、欧米地区で交代に行われてきましたが、化学産業でアジアの重要性が増す中、今年は、アジアでリーダーシップをとっている日本での開催となりました。日本での開催にあたっては、国立環境研究所と産業技術総合研究所の後援を受けています。

今回のワークショップは、「化学物質が環境やヒト健康に与えるリスクの評価を進展させるための、新規科学的手法適用に関する国際的な挑戦」と題し、現在の知見を将来のあるべき姿と関連付け、新技術とそれにより得られたデータを化学物質安全性評価や政策決定に活用していくための議論を行います。そのため、日米欧のLRIとして興味のあるトピックスを4つのセッションとして独立させ、絞り込んだ議論を行うことで、具体的な課題やその解決法を共有していただきます。また、各トピックスの学術的な意義はもちろんのこと、LRIの目的のひとつである「政策決定への支援」まで、踏み込んだ議論を行い、官民それぞれの立場でこれから何をすべきか、ヒントが得られるようなワークショップになることを期待しています。

【開催概要】

期 間 : 2016年6月15日(水)～16日(木)
ただし、プレワークショップ教育セッションは14日(火)

場 所 : 淡路夢舞台国際会議場 (<http://www.yumebutai.co.jp/index.html>)
兵庫県淡路市夢舞台2番地

参加登録: 以下のURLから事前登録をお願いします(参加は無料です)
<https://sites.google.com/site/iccagriworkshop2016/home>

登録期限: 2016年5月13日(金)まで

【進行予定】

6月14日(火)	13:00-17:00	プレワークショップ教育セッション (プレワークショップも3つのセッションに分かれての開催となります)
6月15日(水)	ワークショップ	
	午前 全体会議	日欧米3極のLRI活動の説明等
	午後 分科会	4つのセッションに分かれて開催します
6月16日(木)	ワークショップ続き	
	午前 分科会続き	
	午後 全体会議	各分科会の報告、パネルディスカッションおよびまとめ

<<本件に関するお問い合わせ先>>

報道関係の方 : 一般社団法人日本化学工業協会
その他の方 :広報部 松本 TEL:03-3297-2555
化学品管理部 水越 TEL:03-3297-2575

【プレワークショップ教育セッション内容 : 14日】

Session 1 : 「MeRAM (Multi-purpose Ecological Risk Assessment and Management Tool)」 進行役) 産業技術総合研究所 林彬勲上級主任研究員 (本ツールの開発者)
MeRAM は産総研安全科学研究部門が日化協 LRI の委託事業として開発した環境リスク評価ツールで、3900 物質のデータを装備したユーザーフレンドリーなソフトウェアとして無償で提供されています。日本をはじめ、ASEAN 諸国での普及も視野に入れており、昨年はタイで 2 日間にわたりワークショップを開催しました。この教育セッションでは、このツールを開発した背景やツールの概略の説明に加え、様々な利用法についてデモを行い、理解を深めていただきます。
Session 2 : 「内分泌活性の評価および試験方法のグローバルな展望」 進行役) Environmental and Regulatory Resources, LLC(米国) 社長 Dr. Ellen Mihaich
化学物質がヒトや野生動物の内分泌系をかく乱させるという懸念に対して、各国の規制機関がこれらの影響評価に着手しています。この教育セッションの目的は、各国の内分泌系の評価法と規制要求に関する主要課題についていかに対処するかを取り上げます。内分泌系の経路と機能、米国環境省の内分泌かく乱物質スクリーニングプログラムのような内分泌作用の検査・試験法、リスク評価法と証拠の重み付け手順、および REACH 等の国際的な規制動向等です。
Session 3 : 「証拠の重み付け (WoE) 法の POPs、PBTs への応用」 進行役) ゲルフ大学(カナダ) Prof. Keith Solomon (名誉教授)
完全かつ正確な化学物質評価には正しい科学的な証拠が求められます。しかしながら、全てのデータが同じように得られたわけではなく、発表された研究の情報が不十分だったり、データの偏りがあったり、標準的な手法に沿っていなかったり、品質上の問題がしばしば見られます。したがって、実験法そのものの有効性や得られた知見の妥当性を評価することが重要になります。証拠の重み付け (WoE: Weight of Evidence) はそれぞれの研究に対して透明性のある基準でスコアをつけデータを判断するひとつの手法です。このセッションでは、POPs(残留性有機汚染物質) や PBTs(難分解性生物蓄積性毒性化学物質) の評価に WoE 手法をどのように利用するか実務的な経験例をもとに議論します。

【ワークショップ各分科会の内容 : 15-16日】

Session 1 : 「POPs、PBTs に関する政策決定における証拠の重み付け (WoE) という新しいアプローチと、閾値に基づくアプローチとの比較」
各国の化学物質規制やガイドラインはしばしば改正されており、POPs や PBTs を扱う際には異なる組織で異なる手法をとっています。このセッションでは PBTs や POPs 評価における国際シリコン協会、EPA、カナダ環境局および日本の関係省庁等での最新のアプローチを、複合汚染や難分解性、生体濃縮性、生態毒性等の観点から検討します。
Session 2 : 「新規な環境問題/ケーススタディーと国際協力による解決」
このセッションでは、マイクロプラスチック、E-Waste および廃水等に関わる各国の諸環境問題を紹介します。各課題について、概略を紹介した後、課題解決に向け LRI として、あるいは各国間でどのような協力体制を組めるのか議論します。最終的には、政策決定に向けどのような研究が必要か ACC、Cefic、JCIA をはじめ大学、国立研究所を含む政府機関それぞれの立場で議論します。
Session 3 : 「政策決定に向けた READ ACROSS の挑戦」
READ ACROSS(リードアクロス)は新規物質等で毒性データがない場合に構造的に近い既存の化学物質のデータから類推する手法です。このセッションでは READ ACROSS の必要性、およびデータギャップを埋める上での重要な手法等について概観します。その上で、①READ ACROSS をサポートする生物学的プロファイリングを使いやすくするために最新の科学を利用することの必要性②政策決定に使用するために解決をしなければならない課題等を議論します。
Session 4 : 「疫学調査結果とその発現メカニズムを融合することによる原因の解明」
疫学や毒性学では多くの研究がありますが、通常はそれぞれが独立して行われています。疫学(観察が中心)と毒性学(メカニズム解明が中心)の融合により、化学物質と病態発現の関係をより明確化することが期待されています。これは化学工業界が常に説明を求められていることでもあり、このセッションではこの二つの分野をいかに融合するかを、様々な地域、ステークホルダーによる研究例に基づき議論します。